

墨の痕跡はみとめられるが、判読はできない。木簡の形状は、既報告の兵庫県多紀郡丹南町初田館跡の鎌倉時代井戸出土の呪符木簡四点と似ており、おそらく井戸を埋める際の呪符木簡と推測する。

なお、木簡出土の瓦積井戸は、法隆寺大宝藏殿西側広場井戸SE四八五三や法隆寺東院井戸SE二五〇九の鎌倉時代井戸と似ており、東院の井戸SE二五〇九は瓦が一二〇段以上積まれ、深さも四・一m以上とされ、形状は方形である点を除くと、類似する井戸である。吉田南遺跡の積み上げられた瓦は、吉田南遺跡では屋瓦として使用されたものとは考えられない。平安時代終末・鎌倉時代初頭の瓦が、何故、井戸に転用されたかは不明である。ただ、ある一定期間、数多くの瓦が近くに集積されていたものと考えられ、明石郡衙が衰退していたとしても、播磨国司の東寺再建にかかわる造瓦の力を認めると、東播系瓦の京への積み出し、管理の拠点として吉田南遺跡が関与していたと考えるものである。

9 関係文献

木簡学会『木簡研究』創刊号（一九七九年）
同『木簡研究』第九号（一九八七年）



（岡崎正雄）

兵庫・小犬丸遺跡

- 1 所在地 兵庫県龍野市揖西町小犬丸
- 2 調査期間 一九八六年（昭61）一月～三月
- 3 発掘機関 兵庫県教育委員会
- 4 調査担当者 山下史朗・山上雅弘
- 5 遺跡の種類 駅家跡
- 6 遺跡の年代 奈良～平安時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



（竜野・上郡）

小犬丸遺跡は、早くから古瓦の出土地として知られ、昭和初期には小犬丸廃寺として周知されていたが、昭和四〇年代になって今里幾次・高橋美久二氏らの研究により、『延喜式』にみえる布勢駅家跡と考えられるようになった。

一九八三年度に至って、遺跡の中央部を横切る県道姫路・上郡線の拡幅工事に際して発掘調査が実施され、築地堀に囲まれた複数の瓦

葺建物が発見され、駅館の脇殿と推定されるなど、具体的な遺跡の内容が明らかとなった。しかし、小犬丸遺跡が布勢駅家であることを裏付ける決定的な証拠は、この段階ではまだ得られていなかった。

一九八五年度に、県道竜野・相生線のバイパス工事に先行して、遺跡の中心部から東へ二〇〇mの地点を調査したところ、下記の墨書土器とともに、今回報告する「布勢駅」の名を記した木簡が出土し、小犬丸遺跡が布勢駅家であることの有力な証拠が得られたわけである。

調査地点は、東方の峠に向かって谷幅が狭まり、山脚が谷に迫った傾斜変換点にあたる。

検出された遺構には、山側を幅六〇cm、深さ三〇cm前後の溝で区画された幅およそ七mの平坦面や井戸などがある。この平坦面は幅が一定し、調査区外にもその痕跡を留めるところから道路遺構である可能性が高く、しかもその位置と年代から、古代山陽道である可能性が考えられている。

また、平坦面には道路遺構とは向きを違えた雨落溝をとまなう掘立柱建物跡があり、一一世紀頃の年代が与えられ、この時点では道路が廃絶していたことが指摘できる。

井戸は、平坦面から湿地帯に向けて六m程下った所にあり、一边八〇cmの方形の木組の井戸枠の周り二m四方を方形の石組みで囲んでいる。埋土からは一〇世紀代の土器が出土していて、駅家の中で

も重要な井戸であったと考えられる。

井戸の周辺の包含層からは、食器類を中心とした須恵器・土師器や木製容器など多数の生活用具類とともに、馬形や斎串などの祭祀具や、墨書土器が出土している。墨書土器には、「駅」「布勢井辺家」「布勢□」「布世井マ」など布勢駅家に関係したものがあり、遺跡の性格を裏付けるものである。木簡は、これらの遺物と同様に包含層から出土したもので、八〜九世紀の年代が考えられる。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「布勢駅戸主□部乙公戸参拾人 中大女十□
「十カ」給穀陸×
□□女□□ (229)×(18)×4 081

(2) 「羽在カ」「為五カ」「疋カ」 「羽在聖カ」 「為カ」 「疋カ」
□□□□□□□□ □□□□□□□□ (229)×(18)×4 081

「天カ」「池カ」 「為カ」 「疋カ」
□□□□□□□□ (244)×(35)×5 081

(3) 「右□ (224)×(17)×4 081

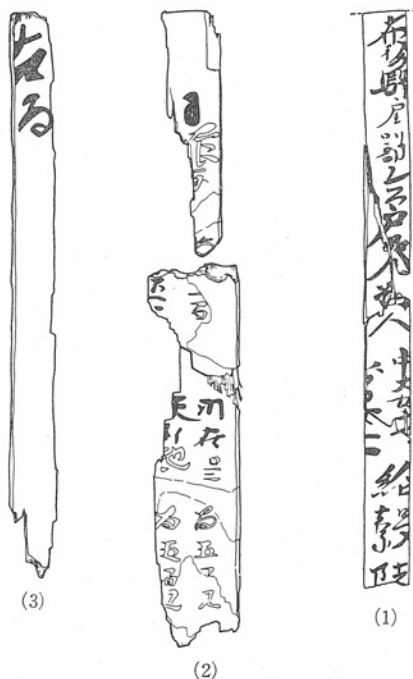
(1)は布勢駅家の戸主である□部乙公の戸三〇人に対し、穀を六□(斗・石などの単位)支給するという内容である。

釈読にあたっては奈良国立文化財研究所の鬼頭清明(現東洋大学)・綾村宏・寺崎保広の各氏に御教示をいただいた。

9 関係文献

兵庫県教育委員会『小犬丸遺跡Ⅰ』（一九八七年）
同『小犬丸遺跡Ⅱ』（一九八九年）

（山下史朗）



（姫路・龍野）

兵庫・姫路城跡（武家屋敷跡）

- | | | |
|---|---------------|---|
| 1 | 所在地 | 兵庫県姫路市本町 |
| 2 | 調査期間 | 一九八七年（昭62）九月～十二月 |
| 3 | 発掘機関 | 姫路市教育委員会 |
| 4 | 調査担当者 | 山本博利・秋枝 芳 |
| 5 | 遺跡の種類 | 城郭跡 |
| 6 | 遺跡の年代 | 江戸時代 |
| 7 | 遺跡及び木簡出土遺構の概要 | 元弘三年（一三三三）、赤松則村が姫山に城塞を築いたことが姫路城の始まりという。慶長五年（一六〇〇）、関ヶ原の戦の功で池田輝政が三河国吉田城より播磨に入部し、同六年より内曲輪・中曲輪および外曲輪の整備に取り掛かり、羽柴秀吉が築城した姫路城の大改築を行ない、同一四年に大天守閣を含む建物群が竣工した。元和二年（一六一六）に池田氏は因幡へ転封され、 |